

第 27 号 農村部と都市部(VVK)の SHG 連携スタート& 設計図が読めないエンジニアの謎

(2006 年 11 月 26 日発行)

<はじめに> 今回の号はとても長文で、すみませ～ん。

多くの読者の皆さんから「感動の総会でした！」との大反響をいただいた前号 PCUR-LINK 便り第 26 号。それなのに、総会 1 週間後…

昨年 12 月に「VVK 加盟 SHG が 25 グループを超えたら、一度ビシャカに行こう」と VVK(1) と約束をしたジャヤチャンドランさん(2)が VVK にやってきて、質問を 1 つ。

ジャヤチャンドラン:「さて、君たち総会の定数は何人かな？」

一瞬の沈黙…

そして、オバチャンたちとプロマネ(3)は一緒になって、会則のページをめくり…

オバチャン1:「フムフム、総会の定数は、全会員数の 3 分の 2 ですねえ。」

一同:「……ギャーアーツ！」

ジャヤチャンドラン:「どうしたのかね？」

オバチャン2:「あの一全会員数の半分しか 10 月の総会に出席していませんでしたー！」

ジャヤチャンドラン:「ふーん、じゃあ 10 月の総会は成立しなかったということだな。」

一同、暗～い顔で沈黙…

せっかくがんばった総会だったのに、誰も定数を気にしていなかったなんて！

また 1 週間後の VVK の会議で…(ナンダカンダと 1 週間に 1 度のペースで会議をしている最近の VVK)

水戸黄門様(4):「ワシも会則を作るというプロセスばかりを気にしておって、会則の中身までよく覚えておらんかったわ。それで今回もう一度会則をよ～く読んだのじゃが、そもそも SHG が VVK の会員だろう？ということは全会員数の 3 分の 2 が総会の定数ということはじゃな、26 の全 VVK 加盟 SHG のうち、3 分の 2 である 18 の SHG が参加しておれば総会は定数に達していたのじゃないか？確か、10 月の総会には 20 の SHG が出席しておっただろう？」

オバチャンたち & プロマネ:「それはそーだわねー。」

水戸黄門様:「おまえさんたち、これでわかったじゃろう。会則をみんなの合意で制定したり、変更したり、ということは理解しておった。しかし、会則の中身までは誰も理解しておらんかった、ということじゃな。すなわち会則を作っただけで満足しておって、本当に会則に沿って、組織(VVK)を運営してゆく、ということがどーいうことか、よくわかっておらんかったということじゃ。まだまだ組織運営の道は長いのを、呵々。」

～農村部と都市部(VVK)の SHG 連携スタート～

「都市近郊農村部の女性自助グループと都市スラムの女性自助グループの連携による新たな産直運動構築と自立のための共有財産創出」という、この JICA 草の根技術協力事業のタイトルをご存じの方はいらっしゃるだろうか。

この 11 月、ようやく重い腰を上げた VVK のオバチャンたちは、農村部の SHG を訪れた。また農村部の SHG のオバチャンたちもピシャカも訪れる、という連携の第一歩を踏み出したのであった。

<その1:都市(ピシャカパトナム)の VVK オバチャン、農村へ行くの巻>

思えばこの半年近く「農村部への視察に行く、行く」と言い続けた VVK のオバチャンたち。

しかし、やれ総会だ、やれ団体登録だ、やれ新規 VVK 加盟グループ勧誘だ、指導員の研修だ等、ととてもとても視察に行く時間がとれなかった。総会も終わって「もう今頃は農村部との連携なんて忘れてるんじゃないか」と思ったプロマネの不安と期待？を裏切るように、総会后すぐに臨時ミーティングを開き、農村部への視察準備の話し合いをした VVK。オバチャンたちのこのしぶとさに脱帽しながら、そのミーティングに出席したプロマネ。

11 月 2 日、朝から晩までのミーティングで、農村部 SHG への視察の課題設定や役割分担を議論し続けたが……

「農村部の雑穀類をピシャカで売る」。

「農村部で使われていない農作物の一部分をクラフト素材としてソムニードに売る」。

この2つのビジネス案をなかなか具体的にできないオバチャンたち。

オバチャン一同:「エーン、アタシら、どんなに考えても視察の課題が決められな～い。視察に行ってから考えるから、農村部の視察に連れてってー！」

と午後 5 時になって、お手上げ宣言をするオバチャンたち。

まあここまで考えてダメだったら仕方ない、と早速、農村部の SHG に連絡をとったソムニードのスタッフ。

「11 月 13、14 日なら来てもいいわよ」と農村部の SHG のオバチャンたちに許可をもらえる。ピシャカパトナムから約 100 キロの隣県スリカラム県にあるポガダヴァリ村という山岳少数民族のオバチャンたちをたずねて行った VVK のオバチャン 15 名。

11 月 2 日のミーティングの直後、早速 VVK のオバチャンたち「視察に行きたい」という依頼状を書いて、ポガダヴァリ村の SHG 宛に出したのだが、その手紙は 11 月 13 日には届いておらず。VVK のオバチャンたちの方が手紙より早く村に来てしまった。恐るべし田舎の郵便配達事情。

さて、ポガダヴァリ村のオバチャンたちはサワラ族という山岳少数民族。

稲作の他、山の斜面に雑穀類や果物を育てたりする農業を生業としている。

言葉は今ではテルグ語という州の公用語も話すが、サワラ語というのが母国語。

ポガダヴァリ村に到着するや否や、山で咲いている花で作った花輪を首にかけられて、大歓迎された VVK オバチャンたち。村の中にある小学校で会議をすることになり、ポガダヴァリ村のオバチャンは、授業が終わっても教室で遊んでいた子どもたちを追い払った。（「蹴散らした」が正確。オバチャン、強し） 小学校:10 畳くらいの教室 1 つの建物。

子どもたちはお母さんたちに追い出されて、ワーといったんは外に遊びに行ったが、ビシャカから来たオバチャンたちが珍しいようで、小学校の窓からのぞき見しては、お母さんたちに「アタたち、あっちで遊んでいなさい！」と怒られていた。

プロマネや黄門様、アシスタント・プロマネ（ 5）はこの地域では珍しいはずの外国人（日本人）なのだが、以前、同村でソムニードは活動していたこともあり、子どもたちにとっては「あ、また来る」くらいで全く興味なし。それよりも初めて村にやってきた VVK のオバチャンたちの方が子どもたちにとっては、珍しい様子。

オバチャンたちだけで VVK のこと、ポガダヴァリ村でとれる農作物のことなどなど、ワイワイと 2 時間近くも話が弾んだ。その間、ビデオ撮影をするアシスタント・プロマネだけを教室に残し、ソムニードのスタッフは小学校の教室から離れたところで会議が終わるのを待っていた。

同村で活動する NGO のスタッフ 1 人がオバチャンたちの会議に参加していて、彼女がオバチャンたちの議論に当然のように口出しをする。説明も何も、全部自分でしょうとする。その度、ソムニードのスタッフは、彼女に黙っていてくれるようお願いし、オバチャンたちだけで話をしてもらった。

そうしたのなぜか、黄門様がいつもソムニードのスタッフに言っていることをちょっと引用。

黄門様:「いくら住民主体だ、住民が主人公だと言っても、本気でそれをやろうとしているかどうかは、こういうところで分かるのじゃよ。」

なぜ、住民同士の話し合いに、外部者の NGO が自分で何でも説明するのかわかるか？

それは、人から聞かれた質問に答える能力が住民にはないと暗に、外部者の NGO が認めているようなものなのじゃ。このプロジェクトは“住民が自主的に…”などと言っても、こんなところで、本質が露呈するのじゃ。

むしろ、こんなときこそ、外部者として関わるものにとって、やっていることが住民にどう理解されているのか、それを確かめるいい機会なのに、発言させない、また、住民も、ナンダカンダといっても、プロジェクトは外から持ち込まれたものだ、自分たちにオーナーシップがないということを知っているから、NGO などの外部者が全部説明しても当然だと思っている。こういうところで、持続可能かとか、参加型の本質とかがよく分かるのじゃ。」

ちなみにポガダヴァリ村には長くから地元のいくつかの NGO が SHG だ、ナンだと様々なプロジェクトを村に持ち込んでいる。教室の中でもビデオ撮影を終えたアシスタント・プロマネが一言。

アシスタント・プロマネ:「アタシ、VVK とポガダヴァリ村のオバチャンの話をずっと聞いていて、とても対照的だと思ったのですが…」

黄門様:「どう対照的だったのじゃ？」

アシスタント・プロマネ:「VVK のミーティングに出ているときは気がつかなかったのですが、こうし

てポガダヴァリ村に来てみると、VVK のオバチャンは違うのです！！」

黄門様：「どう違っておったかの？」

アシスタント・プロマネ：「それはですねえ、ポガダヴァリ村のオバチャンたちは、リーダーの 1 人と、NGO のスタッフ 1 人を除いて、残り人たちは、黙って話を聞いているだけなのですよ。

でも、VVK から参加したオバチャン 15 名は、全員が次から次へとポガダヴァリ村のオバチャンたちに質問していて、誰も黙っていないのですよ！！」

プロマネ：「あーやっぱり、外まで聞こえてくるのはどうも聞き覚えのある声ばかりだと思った。それにしても 15 人全員話していた、とはスゴイねえ。」(騒々しいのはやはり VVK のオバチャンだったか。)

VVK オバチャンたちは NGO スタッフが会議に参加しようといまいと、「プロジェクト」の話ではなく、「自分たちの VVK」の議論に慣れているので、わからないことは自分で聞く、話たいことはナンでも話す、ということが自然に身に付いているのだった。ここが VVK のオバチャンとポガダヴァリ村のオバチャンたちとの大きな違い。同村を訪れた VVK のオバチャンたちの中には、まだ VVK に加盟して 1, 2 ヶ月しか経ってないオバチャンたちもいたが、すっかり自由に議論することに慣れた様子。

その後、山歩きに連れて行ってもらった VVK のオバチャンたちは、またまた大はしゃぎ。

もともと VVK のオバチャンたちの父母や祖父母の世代は、こうした農村部からビシャカパトナムに出稼ぎに来た人々であるが、彼らが捨ててきてしまった村に帰省することはほとんどない。スラムで生まれ育ち、帰る「村」を持たないオバチャンたちには初めての田舎体験となった。いつも食べている米が稲穂になっていること、ターメリック(うこん)やサツマイモが土の中で育つこと、そうしたことを初めてポガダヴァリ村のオバチャンたちに教えてもらって、とても感動していたオバチャンもいた。途中、稲田の前で記念写真を撮ったり、取れたてのサツマイモを食べさせてもらったり、とワイワイと山歩きから戻ったオバチャンが村を後にするとき。

VVK オバチャン 1：「今日はどうもありがとうございました。どうぞビシャカパトナムの VVK にも来てくださいねっ！」

ポ村オバチャン 1：「そうですね、きっとビシャカパトナムにも行きます！」

お互いに握手をしてポガダヴァリ村のオバチャンたちと別れ、宿舎に戻って、なんだかゴソゴソと話し合いを続ける VVK のオバチャンたち。

今回、ソムニードのスタッフは「やれビジネスだ、やれ振り返りのミーティングだ」と一切口出しをしなかった。しかし、視察に何度も参加しているオバチャンたちが率先して、なにやら宿舎に戻っても議論している様子。

オバチャン 1：「あんたち、明日は朝 7 時から、振り返りのミーティングよっ！！」

オバチャン 2：「なんでそんなミーティングするの？」

オバチャン 3：「だって、VVK の 26 の SHG のうち、ポガダヴァリ村の視察に来たのはアタシたち 15 人だけなのよ。他のメンバーにも、ポガダヴァリ村で何を学んだか発表しなくちゃいけないのよっ！！」

オバチャン4:「それもそうねえ。でも朝7時はちょっと早いんじゃない?7時半にしようか。」

なんていう議論の結果、翌朝8時からみんなで頭を寄せ合って何やら議論しているオバチャンたち。

プロマネ:「おはよー、みんなで何をしてるの?」

オバチャン2:「何をしてるのって、また寝ぼけたことを言っちゃって。報告書を作っているですよ、ホウコクシヨ。」

プロマネ:「ナンの報告書?」

オバチャン3:「昨日のポガダヴァリ村の視察の報告書ですよ。ビシャカで11月16日にこの視察の振り返りミーティングを開くことにしたのですよ!!」

プロマネ:「それはそれは。11月16日、楽しみだねえ。」

朝食後、ビシャカパトナムに戻る前に宿舎近くに建設中の生産・物流センターを見に行ったり、近くの市場を訪れ、売られている野菜や雑穀類の価格をせっせと調べるオバチャンたち。生産・物流センターの建設現場では、設計図を見ながら、黄門様に、「このセンターをどう使うか、具体的に考えるように」という宿題をもらっていた。

市場やセンター建設現場から戻ったオバチャンたちがそろそろビシャカに帰ろうか、という時。ポガダヴァリ村のオバチャンから宿舎に電話が入り……。

ポ村オバチャン1:「あのビシャカに行く話なんだけどさ、12月から稲の刈り入れが始まって忙しいのよね。だから早速なんだけどさ、11月20日から28日の間だったらいつでもビシャカに行けるわよ。」

VVK オバチャン1:「ちょっと待っててね。もうしばらく後にもう一度電話するわ。」

ポ村オバチャン1:「あ、うちの村、電話ないからダメよ。今、アタシ町に買い物に来てるんだけど、買い物か済んだら、またアタシから電話するわー。」

「じゃあいつビシャカパトナムに呼ぼうか」とまたまた議論を始めた VVK オバチャンたち。結局、11月21日から23日までの3日間で話はまとまり、ポガダヴァリ村のオバチャンに伝えたのだった。

<その2:農村(ポガダヴァリ村)のSHG オバチャン、都市へ行くの巻>

11月16日。確かこの日は、農村部視察の振り返りのミーティングだったのだが。

オバチャンたちの頭の中は、ビシャカパトナムにやって来るポガダヴァリ村のオバチャンに何を見せよう、何を話そう、と11月21日から23日までの日程のことばかり。午前11時から始まったミーティングもそろそろお昼休み、という午後1時頃。

プロマネ:「ところで、ポガダヴァリ村視察の振り返りってしたの?」

オバチャン1:「ワー忘れてたー。今から話すから、みんなよく聞いて!」

ワイワイとその後1時間くらい、報告する、質問する、を繰り返し、一通り視察の振り返りをした。わずかな昼休みの後、ポガダヴァリ村のオバちゃんたちを迎えるにあたっての準備をまた話し合う。

オバちゃん1:「朝早く宿を出発すれば、スラム訪問の前にあのお寺もこの寺も動物園も、そうねえ3カ所くらいは見せられるわねっ！」

オバちゃん2:「そうすると朝ご飯をどこで食べるか決めないといけないわね。」

ラマラジュ(6):「あ、予約したホテルは3つ星のホテルですから、朝食代は宿泊費に含まれていますよ。」

オバちゃん1:「じゃあ、外で朝ご飯を食べたらもったいないわね。ホテルで朝食を食べてから、お寺に1つ行って、その後、スラムに行きましょう！」

オバちゃん2:「でも3つ星のホテルに、ポガダヴァリ村のオバちゃんたちだけ泊めたら戸惑ってしまうでしょうね。」

黄門様:「何を言っておるのじゃ、VVKからも2人は泊まって、ポガダヴァリ村のオバちゃんたちのお世話をするのじゃ。もちろん女性ばかりで泊まるのは不安だから、ラマラジュにも泊まってもらうから安心せよ。でもラマラジュは泊まるだけじゃ。ポガダヴァリ村の人たちが、ちゃんと部屋の鍵をかけたか、トイレが使えるか、朝食に起きてレストランに行けるか、全部、VVKのおまえさんたちの担当者がお世話をするのじゃ。」

オバちゃん1:「エーッ、アタシたちだってそんな3つ星のホテルに泊まったことないのに。

でもせっかくピシャカに来てくれるのだし、がんばるわ。事前にホテルの下見に行ってくるわー！」

黄門様:「そうじゃ、オマエさんたちならちゃんとお世話できるぞ。だいたいオマエさんたちだって、そういうホテルに泊まって、どんな客がいるのか、どんな施設なのか、慣れることが必要なのじゃ。3つ星クラスのホテルの使い方も知らずに、3つ星クラス、5つ星クラスに泊まるような客を対象にした商売ができると思うかい？」

その後、細かい毎日の日程と各担当者、そして予算作りをして、ポガダヴァリ村のオバちゃんたちを迎える準備は万全。ラマラジュが初めてピシャカに来るといふオバちゃんたちをポガダヴァリ村まで迎えに行き、VVKの事務所まで連れてきた後は、VVKの仕事。

早速視察初日からパワー全開でポガダヴァリ村のオバちゃんを迎えるVVKのオバちゃんたち。3日間のピシャカ視察のうち、3つのスラムを訪問、VVK会議に出席、という忙しい合間を縫って、やれ寺巡りだ、やれビーチ散歩だ、と忙しく日程をこなしてゆくオバちゃんたち。視察最終の3日目には、VVKの活動を紹介しているのだから、ピシャカを観光しているのだから、意味不明に超忙しいハイテンションのクライマックス。

さて話は前後するが、ピシャカ視察初日、VVKの事務所にやってきたポガダヴァリ村のオバちゃんたちは「あー今日はここに泊まるのか」と思ったらしい。ところが、スラム巡り、寺巡りの最後にVVKオバちゃんに連れていかれたのは3つ星のエアコン付きのホテル。(実はこの初日、全然ホテルにチェックインせず、スラム訪問の後、もう1つもう1つと寺巡りを続けるVVKオバちゃんを一喝す

るプロマネ。「ホテルにはチェックインの時間というものがあるのよっ！どこへ行ってもいいけど、まずはさっさとチェックインをしてー！」ホテルのチェックインという制度を初めて勉強したオバちゃんたちであった。)

ホテルのチェックインのとき。

ポ村オバちゃん：「アタシ、こんな素敵なホテル、初めて泊まるわ。」

VVK オバちゃん1：「アタシだって、泊まったことないわよ。でもね、ソムニードが JICA の仕事で視察の予算を取ってくれたから、こういうところに泊まれるのよ。アナタこのホテルの料金表を見て。」

ポ村オバちゃん：「あら、1部屋 2,000 ルピー近くするわね。すごいわね。」

VVK オバちゃん2：「そうよ、でもこれはVVKがここに泊まるう、と言ったのではないの。黄門様がこういうところに泊まるのも勉強だと言ったのよ！」

翌朝、初めてのホテルの朝食。

ラマラジュ：「ほら、こういうのをバイキング方式といって、お皿をここからとって、何でも好きなものを何度でも食べていいのですよ。」

ポ村オバちゃん：「えー、でも慣れないから、ちょっとでいいわ。それにこんなレストラン、落ち着かないから、さっさと食べて部屋に戻るわ。」

それもそのはず、3つ星には決して泊まらないと思われる山岳少数民族やスラムのオバちゃんが団体でレストランにいるのだから、他のお客さんの目は非常に厳しいのだ。こうした環境が初めてのオバちゃんたちにとって、居心地がいいわけがない。

ホテルの客1：「もしもしアナタ、アナタはあの女性たちの連れですか？」

ラマラジュ：「はあ、そうですけど。」

ホテルの客1：「なぜ、あのように貧しげな女性たちがこんな3つ星のホテルに泊まっているのですか？」

ラマラジュ：「えーっと僕の NGO では、農村部と都市スラムの女性たちの連携事業をしていて、昨日から農村部の女性たちがピシャカパトナムに視察に来ているので、ここに泊まっているですよ。」

ホテルの客1：「そいつはスゴイ。そんな NGO はどこにもないですよ。だいたいみんな NGO の人というのは視察とか会議とかなんとかで自分たちだけ星のついたホテルに泊まって、受益者の人々は安宿に泊めるのが普通だと思っていましたよ。」

ラマラジュ：「そんなこと誰が決めたわけでもないでしょうに。そもそも僕の NGO ではパートナーはいても受益者はいませんから。彼女たちは、僕たちと一緒に事業をするパートナーですよ。」

ホテルの客1：「うーん、それはつくづくスゴイですねえ。そんな NGO もあるのですねえ。」

と、そんな話を翌日、プロマネに聞かせてくれたラマラジュと VVK オバチャン。

2 日目の夜には、3 つ星ホテルにも随分慣れたポガダヴァリ村のオバチャンと VVK のオバチャン。いつホテルに戻ってくるのかというラマラジュの心配をよそに、のんびり夕食を外で済まして、午後 9 時にホテルに戻ってきた。翌朝の朝食には、バイキング方式にも、他のお客さんの好奇の目にも、おびえることもなく、堂々と 1 時間以上もゆっくりと朝食をとった。(プロマネ、この朝食の話を聞いて、拍手、拍手！)

視察最終日の VVK 事務所での視察振り返りのミーティングで・・・

黄門様：「今日のミーティングでは、別にビジネスの話などせんでいいぞ。」

VVK オバチャン1：「？？？」

黄門様：「VVK のみんなはポガダヴァリ村に初めて行ったことを話せばいいし、ポガダヴァリ村のみんなははじめてのビシャカ訪問がどうだったか話せばいいのじゃ。ビジネスの話なんか、その気があったら、いつでもできるじゃろうが。それよりも、ポガダヴァリの方は、ビシャカでしか経験できなかったこと、VVK の方は、ポガダヴァリでしか経験できなかったことをお互いに話せばいいのじゃ。」

ポ村オバチャン1：「あの一感想を言えればいいのですか？」

黄門様：「そうじゃよ、VVK がポガダヴァリ村に初めて行ったじゃろう。」

彼女たちの中には米がどうやって田んぼでできるのかわらなかつた人もおつたのじゃ。サツマイモが土の中からとれて、そのとれたての芋をポガダヴァリ村にもらつてとても嬉しかった、と言つておつたぞ。そういうことを話せばいいのじゃ。」

ポ村オバチャン2：「アタシたち、ビシャカに来て本当に嬉しかったの。今まで、いろんな NGO や政府の人たちがアタシたちの SHG を優良 SHG とか言つて、その都度、ハイダラバードとかチェーンナイとか視察に連れていったわ。けど、いつも公民館とか学校とかにギョギョウ詰めで泊まっていたの。誰も私たちがいつ、どこでご飯を食べるかなんて全然気にしてくれないの。」

ひどい NGO なんかハイダラバードの倉庫にアタシたちを泊まらせて、ミーティングが終わると、その倉庫に私たちを入れて、鍵をかけてしまったのよ。私たちをハイダラバードのミーティング以外はどこにも連れていかないで、倉庫に入れたままで、NGO のスタッフは映画に行つたり、買い物に行つたりしてたつていうのよ。」

そういうひどい扱いをされてきて、今回もそうじゃないかと不安に思つてビシャカに来たの。でもとてもいいホテルに泊まらせてくれて、VVK の人たちがどこへ行くにもお案内してくれて、VVK の活動のこともいっぱい話してくれて、お寺にもいっぱい連れて行つてくれて、とても嬉しかったわ。それに、いつもいつもソムニードの人がホテルに電話してきて、「もう帰つてきたか？もうご飯食べたか？」って気にしてくれているのもすごく嬉しかったわ。」

プロマネ：「とてもいいホテルっていうけど、5 つ星には連れていけなかつたのよ。3 つ星なのよ。」

VVK オバチャン1：「アタシ、ちゃんとポガダヴァリ村の人に言つたのよ。この宿泊代も車代も、JICA の事業でお金が出ているのよって、VVK がお金を出しているんじゃないわつて。ポガダ

ヴァリ村のみんなは、次回、もし VVK のお金でビシャカに来ることがあったら、そのときは VVK のみんなのスラムの家に泊まってもいいし、VVK 事務所に泊まってもいいって言ってくれたわ。」

ポ村オバチャン 3:「その通りよ。アタシ、VVK がどんな団体か、村に戻ったらみんなに伝えるわ。そしてもし商売を始めるようになったら、その辺の政府とか NGO なんかと一緒にやらないで、VVK と一緒に仕事をするといいわって、みんなにすすめるわ！」

VVK オバチャン 2:「そう言ってくれると嬉しいわ。私たちは是非、一緒に商売できるよう、がんばりましょうねっ！」

感動の幕開けで、農村部と都市部の SHG 連携のはじまり、はじまり。

～設計図が読めないエンジニアの謎「生産・物流センター建設」～

VVK のオバチャンたちも 11 月に建設現場を訪れ、さっそく「この部屋は何に使おう、あそこはどうしよう」と、今からとても楽しみにしているセンター。

オバチャンたちが「ビシャカパトナムではセンターをつくれな～い！」と諦めた 4 月以降(同便り第 20 号参照)、ソムニードでは、代替案としてビシャカパトナムから 100 キロほど離れた隣県のスリカラム県のパタパトナムというところで生産・物流センターの建設を開始した。といっても実質的な工事が 9 月に始まるまで、土地の購入や登録、建築家による設計、費用の見積もりなどが行われた。

おまけに 9 月以降、季節外れの豪雨などが重なり、建設の基礎工事に時間とお金がかかってしまった(プロマネの涙、エーン)。ようやく工事が始まって、建物の基礎工事をする場所だけが土盛りがされていて、まわりは、まだ湿地状態で、さらなる土盛りをしないと、建物ができても、沈みそう。敷地内の整地にさらにお金がかかりそうで、プロマネは頭が痛い。

それはさておき、ようやく雨が一段落した 11 月は、今までの工事の遅れを取り戻すように猛スピードで工事は進んでいる。

さてさて以前、JICA のご担当者の方にはご説明したことだが、このインドのド田舎のパタパトナムで建設業者というものは全く存在しないに等しく、個人の家を建てる場合、工場を建てる場合、ほとんどすべて家主、オーナーがまさに建設主となり、資材や人足の調達、工事の進捗管理などなど一連の作業を担うことになる。

もちろん建築家というものも存在するが、ド田舎のパタパトナムに建築家はおらず、ソムニードではビシャカパトナムにわずかに存在する建築家の中で、縁のあった 2 名の建築家にセンターの設計を依頼した。ところが・・・

建築家がないということは、設計図を読んで設計図通りに工事ができるエンジニアがない、ということ。印刷でいえば、コンセプトに基づいたデザイン、レイアウトができる人はいないけれど、印刷機を動かせる人がいて、その人がなんとなくパソコンを使ってデザインらしきものをしてパンフレットなどを印刷してしまう、ということなのだ。

ある日のセンター建設現場。

プロマネ：「あのー建築家が出してくれた見積通りに工事は進んでいるんでしょうね？」

エンジニア：「えっ？それは大幅には違いませんけど。でもね、ちょっと工事を進めてみてはじめて、“あ、これがある、あれがある”って感じですからねえ。そんな見積通りに工事なんて、ここではできませんよ。」

プロマネ：「エーっじゃあ、あの8月に建築家が出してくれた見積もりはナンだったわけ？」

エンジニア：「もう少し、工事が進んでからまた見積もりを出してもらわないといけませんよ。だって工事しないとわからないこと多いですからね。」

プロマネ：「ムムムム……」

またある日のセンター建設現場。

エンジニア：「僕、ここに屋根はいらなと思うな、無駄だよなー」

プロマネ：「ちょっと、ちょっと、アナタに屋根がある、いらないと決める権限はないのよ。アナタは、建築家の設計図通りに、工事を進めて言ってくればいいのよ。」

エンジニア：「ブツブツ、この屋根は無駄だと思うけどなあ。ブツブツ。」

この後でわかったことだが、建築家が現場に足を運ぶ度に設計図にない不要な工事をしたり、設計図にある必要な工事をしなかったり、とこのエンジニアに建築家もご立腹。彼が設計図を読みたり描いたりしたのは学生時代のみで、その後の20年間近い間、設計図を使って工事を行ったことは今回が初めてというこのエンジニア。

じゃあそんなエンジニアはさっさと解雇して、他の設計図が読めるエンジニアを雇えばよい、という声はもっともだが、とにかくそんなエンジニアはパタパトナムにはいないので、解雇しても同じこと。

なので、当初予定していなかった以上に、ビシャカパトナムの建築家に何度も何度もパタパトナムの工事現場に足を運んでもらったり、エンジニアをビシャカパトナムに呼んで、建築家から設計図の読み方を習ったり、とタイヘンなことになっている。工事が終わる頃にはこのエンジニアはパタパトナムで唯一設計図の読めるエンジニアになることだろう。（しかし、そんな工事はこれからもパタパトナムではないだろう。ソムニードがまた何か建てることがあれば別だけど……）

130万人都市のビシャカパトナムですら、建築家が設計図を描いて建設する建物はほんのわずか。しかし建築家による設計図のない建物は、当然ながら非常ずさんな工事で、その老朽化のスピードは速い。インドでは多くの新築の建物が、1ヶ月もしないうちに、もう10年来の建物か、という状態になってしまう。せっかく日本の皆さんの貴重な税金を使って建てる生産・物流センターがそんなことでは申し訳ないわけで、ここはひとつきちんとしたセンターを建設しなければ、と建築家の人にも理解を得て、日々、工事の監督を厳しく行っている。

インドの、しかもド田舎での工事は、本当に予想がつかないことが多く、エンジニアの話ではないが工事を始めてみなければわからないことが多いと、この建築家ですら言っている。

ちなみに11月末現在、土台と柱が完成し、いよいよ屋根をつけよう、という段階に入っているの

だが、この建設中の状態でさえ、この建物は全然、この辺りに建てられている他の建物と違って
いる。その綿密な工事とシンプルでかつ機能的なデザインに、村の人々は「ジャパンビルディング」と
よんで、今から注目を浴びている。「ジャパンビルディング」と言っただけで、建築家もインド人、資材も
インド人、工事人もインド人、現場監督もインド人、エンジニアもインド人、と全く日本の要素は工事
現場からは見えないはずなのだが・・・(もちろん資金は日本の皆さんの税金だが)

このセンターが設計図通りに完成するまでにまだまだ紆余曲折がありそうであるが、今からその
完成が待ち遠しい。

～団体登録への道のり～あと登録まで秒読み！？～

今年の6月からスタートしたVVK団体登録。

あれから6ヶ月が過ぎた11月、いよいよ役人も賄賂がもらえないことを悟ったようで、VVKが提
出した書類に初めて目を通した。その後、あれこれ書類にイチャモンをつけ、その都度「はい、あな
たの言う通りです。明日訂正して持ってきます。」という具合に、とにかくその担当役人の言うとおりに
書類の訂正してきたVVKオバチャンたち。

一応、登録事務所ではすべての書類に印を押して、あとは担当官の署名をしてもらっただけの状態
になっている。その最後の署名をもらうだけの段階になってから、かれこれ10日が過ぎた、今日現
在。(11月26日)来週には、いよいよ待望の団体登録完了か！？

賄賂を払わず、ソムニードのスタッフが付き添うこともなく、毎週2,3回は登録事務所に足を運ん
だオバチャンたち。団体登録に必要な業務に精通しているVVKのオバチャンたちは、SHG連合
体に団体登録のアドバイスができる唯一の連合体であろう。

こうした団体登録作業などは、NGOのスタッフがすべて書類を作って、NGOのスタッフが登録
事務所に数回行って、賄賂の数千ルピー(約2,000円～3,000円)でも払えば1ヶ月くらいで終わ
っていたらう。

もちろんソムニードのスタッフは、役人からあれこれ書類にイチャモンをつけられる度にオバチャ
ンたちと一緒に書類の訂正作業はしたが、登録事務所にスタッフが行ったのは11月のわずか
2,3回のみ。オバチャンたちだけで、いよいよ後は署名を残すのみの段階に到達。

諸賢はすでのお気づきのことと思うが、団体登録をすること自体が目的ではない。役人とVVK
が戦う、役人の言いなりになって賄賂を払わない、どんなに時間がかかっても、自分たちで団体登
録をすること、そのために6ヶ月もかかって役所に足を運ぶオバチャンたち。団体登録で役人を戦
うなんて、実は戦いの序章に過ぎない。

これからVVKが戦わなければならない相手は、SHGを無知で無能な貧しい女性として徹底的
に侮っている銀行、NGO、諸々の政府機関、そして厳しいビジネス社会。スラムの女性の自立なん
て、インドの社会では、建前は別として、本音のところであり得ないと関係者が思っていることをし
ているわけで、あり得ないことをすればそれだけ戦う相手も増えるということなのだ。オバチャンたちに
戦う意志がある限り、VVKの戦いは続く。(団体登録への道のり、毎号、次号が最終回になることを

祈るのだが・・・)

< 注意書き >

(1)。VVK:ピシャカ・ワニタ・クランティ略。2005年3月に設立されたピシャカパトナム市内および近郊の27のSHG(マイクロ・クレジットグループ)による連合体。(SHG数は11月26日現在)

(2)ジャヤチャンドラン:タミルナードゥ州チェンナイのNGO「CFDA」の代表。アクシャヤ銀行という同州のSHG連合体の設立に携わる。JICA草の根技協開始2004年以来、SHGやその連合体の研修に講師として参加。今はVVKお目付番として年に数回、ピシャカに喝を入れにやってくる。態度と体格の大きいプロマネも、ジャヤチャンドランに叱られて寝込むことしばしば。

最近では同便りの読者が実際に彼の団体を訪れることも有り、一言。「いやーワシは初めて会う人ばかりなのに、みんなワシのことを知っておるのじゃよ、おかしいなあ。」と。

(3)プロジェクト・マネージャーの略。この便りの筆者、原康子。

(4)水戸黄門様:ソムニード代表理事、和田信明。

(5)アシスタント・プロマネ:「あれも買って、これも買って」という勝手なプロマネやVVKオバチャンに振り回されているようで実はオバチャンにはビクともしないアシスタント・プロマネ、前川香子。

(6)ラマラジュ:オバチャンたちに絶大な信頼を持つ、同事業担当のソムニード・スタッフ。自分は普通にしていることが他からはスゴイ、と言われることが多く、最近戸惑い気味。(ホテルの客との会話、参照
